

## 動作完了の「あげる」と程度副詞の「完全に」に関するノート

著者名(日)	藤巻 一真
雑誌名	Scientific approaches to language
巻	11
ページ	1-15
発行年	2012-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00000688/">http://id.nii.ac.jp/1092/00000688/</a>

# 動作完了の「あげる」と程度副詞の「完全に」に関するノート\*

藤巻 一真

神田外語大学

本稿は述語の持つスケール構造とそれに関わる程度副詞の共起関係について観察する。特に述語に付加される要素によって程度副詞との共起関係が変化するとする Tsujimura 2001 と逆の現象を取り上げる。具体的には Tsujimura において、「ている」が本来「とても」と共起しない動詞に付加されると、それが可能になるという観察に着目し、「とても」と逆の分布をなすとされる「完全に」を取り上げる。そして本来「完全に」と共起しない動詞から「～あげる」の複合動詞を作ると、「完全に」との共起が可能になることを示す。

## 1. はじめに

近年形容詞の段階性(gradability)についてスケール構造に基づく研究が進み、他の現象(例えば、結果構文)と深く関連していることが明らかになってきている。<sup>1</sup> 例えば、Kennedy & McNally (2005) (以下、K&M) によると、形容詞は(1)にあるように最小値または最大値(もしくは両者)を持たないスケールが開いている(OPEN)ものと、最小値と最大値を持っているスケールの閉じている(CLOSED)ものに分類される。

---

\* 本研究はCLS 顧問の井上和子先生主催の研究会における「完全に」についての発表に端を発している。井上和子先生を始め参加者の皆さんに感謝申し上げます。また、執筆にあたり神谷昇氏にもお世話になった。感謝申し上げます。尚、本稿における誤り等の責任は筆者にある。

<sup>1</sup> 小野(2007)及び三原(2009)を参照されたい。

(1) 形容詞のスケール

...whether a scale is OPEN (lacks a minimal element, a maximal element or both) or CLOSED (has minimal and maximal elements)... (K&M:352)

具体的には、(2)にあるように分類される。

(2) a. full, closed, invisible

b. long, expensive, old (K&M's (18):352)

(2a)にある形容詞は、最大値もしくは最小値をそのスケール上に持つ、閉鎖 (CLOSED) スケールの形容詞である。一方、(2b)のものはそれらを持たない、開放 (OPEN) スケールの形容詞である。これらの違いは、それらを修飾する語句との共起関係に現れる。例えば、程度量を表す *half* や、終点指向 (endpoint-oriented) の *completely/fully* などは、閉鎖スケールの形容詞と共起するが、開放スケールのものとは共起しない。(例はいずれも、K&M からの引用であり、強調は筆者付加。)

(3) 閉鎖スケールの形容詞

a. The glass is **half/mostly** full.

b. The figure was **completely** visible/invisible.

(4) 開放スケールの形容詞

a. ??The rope is **half/mostly** long.

b. Her brother is **completely** ??tall/??short.

本稿では、これら形容詞における段階性の研究を踏まえて、動詞における (出来事や状態の) 段階性について副詞との共起関係を観察する。先ず第2節で、日本語における程度副詞の「とても」と動詞の共起関係を扱った Tsujimura 2001 を取り上げ、興味深い観察とともに本稿に関わる論点を概観する。これを出発点として第3節では、複合動詞の「～あげる」を

取り上げ、副詞との共起関係を観察し、それに対して若干の考察を加える。

2. 「とても」と段階的な状態：Tsujimura 2001 を中心に  
本節では、日本語の程度副詞の「とても」と動詞の共起関係を動詞の語彙概念構造における STATE とその状態の段階性およびその基準から導き出そうとする Tsujimura 2001 を取り上げ、後の観察の基礎とする。

先ずは、基本的なことであるが、「とても」は多くの段階性のある開放スケールの形容詞と共起可能である。「空だ」「満タンだ」は終点があるので閉鎖スケールである。

- (5) a. この猫はとてもかわいい。  
b. この本はとてもおもしろい。
- (6) a. \*このボトルはとても空だ。<sup>2</sup>  
b. \*このタンクはとても満タンだ。

さらに「とても」は一部の動詞とも共起する。<sup>3</sup>

- (7) a. 太郎はとても苦しんだ。  
b. 星がとても光った。  
c. 道がとても広がった。  
d. 内容がとても変わった。

(T's (14)~(17):33 強調筆者付加)

一方、次のような動詞は「とても」と共起しない。<sup>4</sup>

---

<sup>2</sup> 「空だ」「満タンだ」は、国語学における品詞分類上は形容詞ではないが、英語の形容詞の empty と full に対応する状態性の語として、形容詞の「かわいい」との対比している。英語の形容詞に対応する日本語は所謂イ形容詞にならないものが多く、ナ形容詞や動詞の「ている」形にしないと難しいという指摘が三原 2009 にある。

<sup>3</sup> 「とても」と共起する動詞のクラスとして心理述語(psych verbs)、放出・発散動詞(verbs of emission)、脱形容詞状態変化動詞(change of state verbs (deadjectival verbs))、対応する形容詞のない状態変化動詞(change of state verbs (those do not have adjectival counterparts; inchoative))を挙げている。  
(Tsujimura 2001: 34)

- (8) a. \*太郎はとても走った。  
 b. \*太郎はとても笑った。  
 c. \*太郎はドアをととても叩いた。

(T's (29)-(31):38)

ここで見た(5)～(8)の対比は、述語の語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure, 以後 LCS)における STATE の有無から導き出せるというのが大切な論点である。<sup>5</sup> つまり、「とても」が共起可能な述語は、(9)にある LCS において STATE を含んでいることが必要条件となる。

- (9) a. Stative: [ ]<sub>STATE</sub>  
 b. Activity: [x ACT]  
 c. Achievement: [y BECOME [ ]<sub>STATE</sub> ]  
 d. Accomplishment: [[x ACT] CAUSE [y BECOME [ ]<sub>STATE</sub> ]

例えば、(7)にある述語は、所謂「心理述語」や「状態変化」の述語であり、その LCS の内部には STATE がある。<sup>6</sup> 一方、(8)にある述語は、「動作」であり STATE を含まない。ただし、STATE があるだけでは、「とても」と共起するわけではなく、その「状態」が開放スケールでないとか起しないというのは、(6)で見たとおりである。つまり、スケールにおいて開放スケールの語（形容詞や動詞）と「とても」が共起するということ

---

<sup>4</sup> (i)の例は、「とても」と共起するがその意味として「動作の対象物（目的語）の数量が多い」という意味であり、(7)にあるように、「動詞の表す出来事の程度」という意味ではないので、Tsumimura では考察の対象から外されている。由本 2005 では、これらは数量詞（「たくさん」等）を追加しないと容認できないとされる。その場合、「とても」は「たくさん」（開放スケール）にかかる解釈となりここでの問題とは関係がなくなる。筆者にも(i)は非文とは言えないまでも良くない。

- i. 太郎は言語学の本をととても読んだ。  
 ii. 太郎は言語学の本をととても {たくさん/\*三冊} 読んだ。

<sup>5</sup> Tsumimura では、(9)に対して LCS という術語を用いていないが同じことである。

<sup>6</sup> 変化の述語でも、場所の変化は、「とても」と共起しない。

- i. \*船がとても沈んだ。  
 ii. \*ボールがとても落ちた。 (T's (32), (33):38)

である。

また、(10)のように STATE を内部に持つ動詞であってもそもそも段階性がないと「とても」と共起しない。<sup>7 8</sup>

- (10) a. \*猫がとても死んだ。  
b. \*おもちゃがとても壊れた。  
c. \*木の枝がとても折れた。  
d. \*皿がとても割れた。 (T's (35):39)

さらに、「とても」とは共起できても「完全に」が共起できないことから、(7)にある動詞の STATE は開放スケールであることが確認される。

- (11) a. \*太郎が完全に苦しんだ。  
b. \*星がすっかり光った。  
c. ?\* スープが完全に温まった。 (T's (50):43)

以上をまとめて、「とても」について次の条件を挙げている。

- (12) a. A verb must have a **STATE** component in its event structure.  
b. The STATE component must refer to a **gradable** property.  
c. The gradable property defined over scale structure must

---

<sup>7</sup> Tsujimura 2001 においては、Kennedy & McNally 1999 を仮定しているので、ここでいう OPEN と CLOSED を用いず、standard (基準) が trivial (自明、文脈に依存しない) か non-trivial (非自明、文脈に依存する) かという区分を用いているが、trivial standard は終点を持つので、ここでいう CLOSED スケールのことになる。

i. An adjective has a trivial standard iff its standard defaults to an endpoint of the scale.

ii. An adjective has a nontrivial standard iff its standard is context dependent. (p. 42)

<sup>8</sup> 佐野 1998 においても同様の観察があり、「とても」は主体変化動詞と呼ばれる一群の動詞のうち、「変化達成後も更に変化が進展する可能性を持ち、程度の異なる複数の達成点を想定しうる動詞(p.9)」（「進展性に限界を持たない動詞」）と共起し、逆に変化の進展性に限界があるものとは共起しないと分析している。また、「とても」の反対の「ちょっと」「少し」は、限界性に関係なく進展的变化の場合に共起可能であるとしている。(p.12) 例えば、(10)において「死ぬ」以外とは、主語の「数量」の解釈ではなく、共起可能である。「ている」を付けるとすぐ後で見るように問題なくなる。

i. おもちゃが {ちょっと/\*とても} 壊れた。 ... {ちょっと/とても} 壊れている。

be with **nontrivial** standard.

(T's (54):45 強調筆者付加)

さて、本稿に関わる興味深い現象として、「ている」の付加により、内部に STATE を含みながらも本来は「とても」と共起しない動詞（閉鎖スケールの STATE を持つ動詞）において「とても」との共起が可能になるという観察がある。<sup>9</sup>

- (13) a. \*針金がとても曲がった。  
b. 針金がとても曲がっている。
- (14) a. \*トーストがとても焦げた。  
b. トーストがとても焦げている。
- (15) a. \*アイスクリームがとても凍った。  
b. アイスクリームがとても凍っている。
- (16) a. \*洗濯物がとても乾いた。  
b. 洗濯物がとても乾いている。

(T's (39)-(42):40-41)

(13)を例にとると、「曲がる」はその LCS に[y BECOME *BENT*]のように *BENT*（「曲がっている」状態）という STATE を持つ。この場合の *BENT* は閉鎖スケールであり、「とても」と閉鎖スケールの *BENT* をその内部に含む「曲がった」とは共起できない。これに対して「ている」を付加することによりそれが可能となるという観察であるが、それは「ている」の付加により、「結果状態」に焦点があたり、スケールが「どのくらいその状態なのか」という開放スケールに変化すると説

---

<sup>9</sup> もちろん、「ている」を付加しても動作動詞の場合、つまり動作の進行を表す「ている」は、そこに段階性の状態がないのであるから、「とても」と共起しない。

i. \*太郎はとても走っている。（進行）

また、由本 2005 においては、Tsjimura 2001 の分析を修正発展させて「～すぎる」の分析を行っている。そこでは「凍る」「焦げる」は段階性がない結果状態を含意するとされ、「～すぎる」がつくことにより、段階的に解釈されるようになるとして次の例を挙げている。

ii. シャーベットが凍り過ぎて、触感がよくない。（p.234）

明されている。<sup>10</sup>

### 3. 「完全に」と動作完了の「あげる」

本節では、Tsujiura 2001 における「ている」の付加による動詞が「とても」と共起可能になるという観察の逆の現象を取り上げる。具体的には複合動詞の「～あげる」を取り上げる。まずは次項で「～あげる」に関する基本的なことを概観する。

#### 3.1 「～あげる」：姫野 1999 を中心に

姫野 1999 に「～あげる」「～あがる」に関して詳細な分類があるが、ここでは、その中でも方向として「上げる」「上がる」の意味のない、「人間の作業活動の終了に伴う「出来上がり品」が予想される(p.49)」場合の「～あげる」「～あがる」に絞って話を進める。

(17)にその例を挙げるが、姫野においては、下位区分はされていないが、ここでは「完成品を作り出す」作成動詞と「動詞の指定する状態にさせる」状態変化動詞を区別しておく。

(17) <完成品を伴う作業活動の完了>

- a. 作りあげる 編みあげる 書き上げる
- b. 洗いあげる 焼きあげる ゆであげる

「～あげる」はただ単に動作が「終了」したのではないのであり、その点においては「～終える」とは異なるとされる。<sup>11</sup>

次にここに挙げた複合動詞は対応する自動詞の「～あがる」を持ち、ちょうど他動詞文からの直接受け身文と格等が同様の関係にある。

---

<sup>10</sup> Tsujimura では、「ている」の付加により、基準(standard)が文脈のいらぬ(終点のある)自明(trivial)なものから、文脈に依存する非自明(non-trivial)なものに変化したと述べているが基本的に同じである。

<sup>11</sup> この点に関して、姫野は日本語学習者の誤用として次の例を挙げている。

i. \*漢字を習いあげた。(姫野:49)



(18) a. 太郎は雪だるまを作りあげた。

b. 雪だるまが作りあがったら、お家に入りなさい。

同じ動作の完了であっても、次のようなものは対応する「～あがる」がない(p.53)。

(19) <作業活動の完了>

調べあげる            \*調べあがる

教えあげる            \*教えあがる

売りあげる            \*売りあがる

以上、本稿で取り上げる「～あげる」に関して基本的な特徴を確認した。

### 3.2 「完全に」: Tsujimura 2001 から

ここでは、「完全に」と動詞の共起関係を取り上げる。まず、「完全に」は「とても」と逆の分布をなす。開放スケールのものは「完全に」と共起しないということである。

(20) a. この猫は {とても/\*完全に} かわいい。

b. この本は {とても/\*完全に} おもしろい。

(21) a. このボトルは {完全に/\*とても} 空だ。

b. このタンクは {完全に/\*とても} 満タンだ。

動詞に関しても同様である。(次の例は Tsujimura 2001 の(47)～(50)を合わせて表記してある。)

(22) a. 太郎は {とても/\*完全に} 苦しんだ。

b. 星が {とても/\*完全に} 光った。

c. スープが {とても/?\*完全に} 温まった。<sup>12</sup>

---

<sup>12</sup> この判断は、Tsujimura によるが、「温まる」「広がる」に関しては、脱形容詞状態変化動詞であり、以下の例のように「完全に」との共起は可能であるように思われる。「変わる」も同様である。小野 2005 によれば、閉鎖スケールのもので、very が可能な場合がある。また、これらは佐野 1998 の言う「変化達成後も更に変化が進展する動

閉鎖スケールの動詞は「すっかり」「完全に」と共起する。

- (23) a. 針金が {\*とても/すっかり} 曲がった。  
b. トーストが {\*とても/すっかり} 焦げた。  
c. アイスクリームが {\*とても/すっかり} 凍った。  
d. 洗濯物が {\*とても/すっかり} 乾いた。

(T's (39a)(40a)(41a)(42a)と(63)を合わせて表記)

さらに、「ている」が付いている場合の以下の例は「とても」と同時に「すっかり」「完全に」も可能である。

- (24) a. 針金が {とても/すっかり} 曲がっている。  
b. アイスクリームが {とても/すっかり} 凍っている。  
c. 洗濯物が {とても/すっかり} 乾いている。

(T's (39b)(41b)(42b)と(65)を合わせて表記)

このことは、「とても」が開放スケールと共起し、「すっかり」が閉鎖スケールと共起することと一見矛盾しているが、それは「とても」と「すっかり」のスコープが異なり、否定文にするとその違いが明らかになると説明されている。

- (25) a. 洗濯物がとても乾いていない。  
b. 洗濯物がすっかり乾いていない。

(T's (67):50 強調筆者付加)

つまり、依然として「すっかり」は「乾く」にかかるので閉鎖スケールであるということである。<sup>13</sup>

---

詞」であって、変化の進展が限界点に至ったことを「完全に」が表していると考えられる。ただし、開放スケールのものは基本的に「完全に」と共起しない。

- i. 体が完全に温まってから、出てきなさい。
- ii. 道が {とても/?完全に} 広がった。

<sup>13</sup> ただし、このことはそれほど明らかではなく、(25b)において部分否定の「一部乾いていない」と取れるが、一方、全否定の「全然乾いていない」の解釈が可能であるように思われる。これは、前注と同様に、閉鎖スケールの形容詞でも、very と completely の両方と共起するものがあることと関係しているかもしれない。dry, full などその例であ

### 3.3 「完全に」と「あげる」

ここでは「完全に」と本来そのままでは共起しない動詞が複合動詞の「～あげる」となると、「完全に」と共起することを観察する。まずは、その基となる例を(26)に挙げる。これらは複合動詞「～あげる」となる動詞である。

(26) a. 太郎は雪だるまを作った。

b. 太郎は童話を書いた。

c. 太郎は卵をゆでた。

d. 太郎は皿を洗った。

これらの動詞は(27)のように「とても」と共起しない。可能であるとされる場合でも、注4でも述べたように目的語の数量の多さを意味する「とても」であるので考察対象から外しておく。

(27) a. \*太郎は雪だるまをととても作った。

b. \*太郎は童話をととても書いた。

c. \*太郎は卵をととてもゆでた。

d. \*太郎は皿をととても洗った。

次に、これらの動詞が「完全に」と共起するかということであるが、以下のようにそれとは共起しないことが分かる。<sup>14</sup>

---

る。(詳しくは小野 2005 を参照。)しかし、そうであるとする、今度は(25a)においてなぜ「とても乾いているということではない」という解釈がないのかの説明が必要になる。否定が絡む現象は今後の課題とする。

<sup>14</sup> 神谷昇氏(私信)より、文脈により数量詞の付かない裸名詞句の数量が想定できる場合、例えば「太郎が論文を完全に書いた」が完璧とは言えないまでも可能ではないかという指摘を頂いた。同時に、その場合でも「論文を完全に書きあげる」との差があるという指摘も頂いた。筆者には(28b)は非常に悪いのであるが次の(i)も同様に悪く思われる。

i. ?\* 太郎は2本の論文を完全に書いた。

ii. 太郎は2本の論文を完全に書きあげた。 ((32)参照)

数量詞の付かない裸名詞句の解釈が文脈によりどのように影響するか、本稿では詳しく入る段階にないので、(28)がどの程度悪いのかのさらなる検討が必要であると述べるにとどめておく。

- (28) a. \*太郎は雪だるまを完全に作った。  
b. \*太郎は童話を完全に書いた。  
c. \*太郎は卵を完全にゆでた。  
d. \*太郎は皿を完全に洗った。

その理由は、「完全に」がスケール上に終点を持つものと共起するからであると考えられる。そうすると興味深いのは「雪だるまを作った」は、「最後まで作って完成した」ことを意味していない点である。(このことは後にも見る。)

そうであるならば、「ている」を付加して動詞との共起が可能になったように、終点の意味を持つ要素を付加すれば、「完全に」との共起が可能になるはずである。そこで、これらの動詞を複合動詞の「～あげる」にして終点を付加し、「完全に」と共起するかを試してみる。

まずは、(27)をもとに「～あげる」の複合動詞の例を作る。

- (29) a. 太郎は雪だるまを作りあげた。  
b. 太郎は童話を書きあげた。  
c. 太郎は卵をゆであげた。  
d. 太郎は皿を洗いあげた。

ここから、対応する自動詞文が作れるのは先に見たとおりである。

- (30) a. 雪だるまが作りあがった。  
b. 童話が書きあがった。  
c. 卵がゆであがった。  
d. 皿が洗いあがった。

次に「完全に」を付加した例が(31)である。<sup>15</sup>

---

<sup>15</sup> 姫野において「～あげる」の修飾語句として「すっかり」を挙げているが、対比として「あげる」の付かない基となる動詞と「すっかり」が共起するかは扱っていない。例えば「\*雪だるまをすっかり作った」である。

- (31) a. 太郎は雪だるまを完全に作りあげた。  
b. 太郎は童話を完全に書きあげた。  
c. 太郎は卵を完全にゆであげた。  
d. 太郎は皿を完全に洗いあげた。

この場合に「完全に」が目的語の数量に関してでない点を確認する例として次のものを挙げる。

- (32) a. 太郎は3体の雪だるまを完全に作りあげた。  
b. 太郎は3本の童話を完全に書きあげた。  
c. 太郎は3この卵を完全にゆであげた。  
e. 太郎は3枚の皿を完全に洗いあげた。

例えば、(32a)であるが、「雪だるまを適当ではあるが3体作った」という意味ではなく、「3体とも完全にしあげて、作った」とい解釈である。

また、「～あげる」の付かない(27)は、次のように所謂 for と in によるテストをしてみると、Tenny 1994 という両者が可能な場合である。<sup>16</sup>

- (33) a. 太郎は雪だるまを {10分で/10分間} 作った。  
b. 太郎は童話を {10時間で/10時間} 書いた。  
c. 太郎は卵を {5分で/5間} ゆでた。  
d. 太郎は皿を {30分で/30間} 洗った。

そこで、一方を用いて「完全に」と共起するかを見てみると、どちらも共起しないといえる。特に「10分で」として「作る」行為に終点を設けても「完全に」との共起は不可能である。

- (34) a. \* 太郎は雪だるまを 10分間完全に作った。  
b. ?\* 太郎は雪だるまを 10分で完全に作った。

---

<sup>16</sup> このような事象の限界性に関する詳しい分析は岩本 2008 にあり、結果構文の限界性に関して統語的に分析する試みが三原 2009 にあるので参照されたい。

「完全に作りあげる」と同義と思われる「完成する」<sup>17</sup> という動詞にすると当然ではあるが「10分で」と共起する。

- (35) a. \*太郎は雪だるまを 10 分間完成した。  
b. 太郎は雪だるまを 10 分で完成した。

このことは、時間の付加詞によって事象を限定しても述語自身が限界性を持つ事象になったとはいえないということを示している。つまり、「完全に」はやはり「作る」の意味概念における終点の有無を問題としているということである。この場合、「作る」自身はそもそも終点を持たない動詞ということである。

もちろん、「～あげる」は複合動詞としてその内部に終点を持つのであるから、以下にあるように「10分で」とは共起するが「10分間」とは共起しない。

- (36) a. 太郎は雪だるまを {10 分で/\*10 分間} 作りあげた。  
b. 太郎は童話を {10 時間で/\*10 時間} 書きあげた。  
c. 太郎は卵を {5 分で/\*5 間} ゆであげた。  
d. 太郎は皿を {30 分で/\*30 間} 洗いあげた。

以上、閉鎖スケールと共起する程度副詞の「完全に」は、作成動詞と（対応する形容詞のない）状態変化動詞と共起しないが、それらを基にして動作完了を表す複合動詞を作り「～あげる」にすると、「完全に」と共起することを観察した。

#### 4. まとめ

本稿は、述語の持つスケール構造とそれを修飾する程度副詞の共起関係が述語に付加される要素によって変化することを中心に見てきた。Tsujiura 2001 における、「ている」が本来

---

<sup>17</sup> 「完成（する）」とは国語辞典によると「完全に、できあがる（作りあげる）こと」とある。（『新明解国語辞典（第4版）』より）

「とても」と共起しない動詞に付加されると、それが可能になるという観察から出発し、「とても」と逆の分布をする「完全に」を取り上げて、本来「完全に」と共起しない動詞を基に「～あげる」の複合動詞を作ると、それが可能になるという観察をした。このことをどの部門で捉えるのがよいのか等理論に関わることは今後の課題とする。

## 参照文献

- 岩本遠億. 2008. 『事象アスペクト論』 開拓社.
- 姫野昌子. 1999. 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房.
- Kennedy, Christopher and Louise McNally. 1999. From event structure to scale structure: Degree modification in deverbal adjectives. *Proceedings of SALT 9*: 163-180.
- Kennedy, Christopher and Louise McNally. 2005. Scale structure, degree modification, and the semantics of gradable predicates. *Language* 81-2: 345-381.
- 三原健一. 2009. 「スケール構造から見る結果構文」『結果構文のタイポロジー』 141-170. ひつじ書房.
- 小野尚之. 2007. 「結果述語のスケール構造と事象タイプ」『結果構文研究の新展開』 67-101. ひつじ書房.
- 佐野由紀子. 1998. 「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』 3:7-22.
- Tenny, Carol. 1994. Aspectual roles and the syntax-semantics interface. Reidel, Dordrecht.
- Tsujimura, Natsuko. 2001. Degree words and scalar structure in Japanese. *Lingua* 111:29-52.
- 由本陽子. 2005. 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』 ひつじ書房.

辞典

金田一京助他. 1995. 『新明解国語辞典（第4版）』三省堂.

261-0014

千葉県美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

*fujimaki-k@kanda.kuis.ac.jp*